

殘花聚園 (九)

(日本幼兒教育史資料)

東京女子高等師範學校教授 石川 謙

七、才覺のちくすだれ

井原西鶴は、江戸時代上期の關西文學者の尤である。彼の小説は、最も寫實的な要素に富んでゐるといはれてゐる。然し此處に掲げる彼の文章が、其のまゝ事實であつたかどうかは問題ではない。彼の當時に於いて、彼の持つてゐた兒童觀が我々の興味をそゝるのである。『世間胸算用』(元禄十二年作)卷の五「才覺のちくすだれ」の中で、興味ある兒童觀を語つて次の様に述べてゐる。

「或人の息子、九歳より十二の年の暮まで、手習に遣はしけるに、其間の筆の軸を集め、其外、人の捨てたるをも取集めて、程なく十三の春、我手細工にして軸簾を拵へ、一つを一匁五分づゝの三つまで賣拂ひ、始めて銀四匁五分儲けしこゝ、我ながら唯者にあらず、親の身にしては嬉しさの餘りに、手習の師匠に語りければ、師の坊此事を好しきは譽め給はず、我此年まで數百人子供を預りて指南して見及びしに、其方の一子の如く、氣の働

き過ぎたる子供の、末に分限に世を暮らしたる例無し。又乞食する程の身代にもならぬもの、中分より下の渡世をするものなり。」

此の話は、九歳から十二歳の年の暮まで、手習にいつてゐた子供の氣働きに對する師匠の考へ方を對照して、二つの子供觀をくつきり、浮び出させたものである。親の方では生活の側から——將來の職業生活と現在の子供の氣働きを一つに繋ぐ單純なもの、見方から、大人になつた後の生活態度を中心として、それを現在に推し及ぼしてゆく素朴的な考へ方である。逆に云へば、現在がその形のまま、大きく膨れて將來に成るこゝろに立て前から、子供の中に「大人」を見つけようとしてゐるかのやうに思へる。所が師匠の方は、一應大人に子供との心の働きをくつきり、區別して、子供の子供らしさから、聽て大人の大人らしさが「成長」するものであると睨んでゐるのである。随つて子供から大人への道は單なる一本條ではなくして、血の通

ふ「成長」が介在するのであると見てゐる。此處に兒童觀の大きな隔りが有り、進歩的な發展要素が潜んでゐるのである。

「かゝる事には様々の仔細ある事なり、其方の子ばかりを賢き様に思召すな。それよりは手廻しの賢き子供あり。我當番の日は言ふに及ばず、人の番の日も帚取々座敷掃きて、數多の子供が毎日使ひ捨てたる、反古のまろめたるを、一枚々々皺伸ばして、日毎に屏風屋に賣りて歸るもあり。是は筆の軸を簾の思附よりは、當分の用に立つ事ながら、是もよろしからず。又或子は紙の餘計、持参りて紙使過して不自由なる子供に、一日一倍増の利にて是を貸し、年中に積りての徳何程さいふ限無し。是等は皆それ々の親の智賢き氣を見習ひ自然と出る己れ々々か智恵にあらず、其中にも一人の子は、父母の朝夕仰られしは、外の事無く手習を精に入れよ。成人しての其身の爲になる事との言葉、反古にはなし難し、且暮れ讀書に油斷なく、後には兄弟子も勝れて能書になりぬ。此心からは行末分限になる所、見えたり。其仔細、一筋に家業稼ぐ故なり。」

師匠の長い經驗と大勢を觀てる目からいへば、子供が子供ならぬ大人らしさをしらすく振りまわしてゐるのは、決して自然の状態ではない。家庭に於ける大人の生活

態度や、がつ／＼した生活競争への氣構へが、何時の間にかうつ／＼して、子供を子供らしさから引き離して、淺ましい大人らしい淵へ投げ込んでしまふのである。大阪人の抜け目のない生活意識が、小賢い生活手段となつて現れてゐる所を、大阪の子供の智慧才覺となつて出て來たものである。武士の子の武士らしさ、商人の子の商人らしさ、金持の子の金持らしさ、貧しき家の子の貧乏人らしさは、此の師匠の目からは何れも子の心の自然の働きではなくて、環境からおされた大人生活の空恐ろしい映像である。一應そうした環境を離れて、子供をどこまでも子供らしく仕立てる事は、其の時々の年齢に伴ふ自然の心の働を、力強く正しく充實させる道である。子供の頭の中に「大人」を宿らせるのではなくて、どこまでも子供らしい子供にする事が、纏て成熟しての後大人らしい大人をつくり上げる道である。

「戀じて親より仕繼ぎたる家職の外に、商賣かへて仕繼ぎたるは稀なり。手習子供も己が役目の手書く事は外に無し。若年の時よりするごとく無用の欲心なり。それ故第一の事は書かざる事淺まし。其子なれども左様の心入、好き事さと言ひ難し。兎角少年の時、花をむしり、紙薦を上し、智恵つく時に身を固めたるこそ道の常なれ。七十になるもの、申せし事、行末を見給へ云ひ置かれ

し。師の坊の言葉に違はず、此者們、我世を渡る時節になつて様々に稼ぐ程成下つて、軸簾せし者は、冬日和の道の爲めに、草履の裏に木をつけて、履くこま仕出しけれども、是も繼ぎて世に流行らず。又紙屑集めし者は、ちやん塊の土器仕出して世に賣れども、大晦日にも燈火一つの身代なり。又手習ばかりに精を入れたるものは、物毎疎く見えけるが、自然に大氣に生れつき、江戸廻しの油、寒中に氷らぬこまを分別仕出し、樽に胡椒一粒づゝ入れるこまにて、大分利を得て年を取りけるに同じ思ひ附きにて油土器と油樽と人の智慧は違ふたるものは無し。」

「兎角少年の時は、花をむしり、紙薦を上し、智慧つく時に身を固めたるこそ道の常なれ。」といふのが、此の師匠の兒童觀でもあり同時に兒童教育觀でもあつた。『世間胸算用』の作者は、此の兒童觀が教育觀が、決して誤つてゐない事を、是等の澤山の子供の將來の生活に於て證據立てるる。理論ではなく事實に於いて、かうなるものだ。力強く保證してゐるのである。軸簾を考へ出した子供は、大人になつて後それ相應の小さい智慧を働かせて、小利巧な工夫をこらした商賣を考へ出したものゝ大きな發展は遂げられなかつた。手習ばかりに精を入れて、子供の時には子供らしく育てられた子供は、成人して後に立派な商人と成つて榮た。

云ふのである。將來の生活が事實として、此の通りに變はるものかきうかを別として、かうした兒童觀が元祿時代に既に發達した事は注目すべき事である。

次に今一つ『本朝町人鏡』の例を引用して、大人の氣持に引きつけて、子供を眺める事の愚しさを説いた其の當時の主張をつけ添へて置きたい。

「いきさし生けるものに、子に迷はざるは一人も無し。何ほぎ愚に生れ付きたる子息にても悪敷といふ事必ずすなかれ、悪事かさなりて異見の杖を振あぐるうちにも、脇から取あつかふ人のをそきを恨むること也。殊更七歳より内の沙汰はたさへば左の手して箸を持ち、鐵槌にて茶釜たゞき割とも氣のつよき所、男はそれじやぞ、箸も後には我と右に持つもの云流し、かりにも餘所の子のかしこきこもお出しにも致さぬことぞ。人の子の五歳にて大學讀むは耳に入らず。我子の十一になりて、竹箒にて鎗持のまねするを、手の振やうが善きとて客の有たびいたさせける。是等は人の事にて笑へき、其身に成ては、うつけたる子事々に利發に見へける。末々の者の子の自ら我儘に鈍なる事、母の親のふさころにて、そこゝに育てけるうちに、はや三歳の比より悪智慧付て是八十までなほらず。民百姓の子にても、付置きて育てさせたきものは乳母なり。諸事物入に是非無く、中分の下の身代

までは置かねけるも理りなり。給銀八十目、四季着て上下の帯ぶまころ紙手足の入用まで算用するに随分かなしき家の乳母にても、一人一年に銀三百四十五匁程は定まりて入るもの也。是によりて女房の乳を呑せける。中位なる人の内儀、十七八より縁に付き、其一させ二させのほきは櫻に藤に物見姿をつくりて、我男にもあれなれば堪忍比ま見られ、跡のしれる盛形の菜は喰もせざりしに、ひまり子をもうけて我手に掛けてしめやしうの物を干して、勾ひ目に移り、此子は身の行すゑの樂まは思はず、何の因果に今やなごも無理なる事の口惜しく、それから身を捨て芝居行き天王寺參詣もやめける。扱て身體を子のためさて、かせぐにはあらず。ひまり下子に子を抱かせてありく事をうらみける。今の世の心、奢にっれていなものにぞありける。」(昭和十四年九月十五日)

厚着豫防

秋からつゞくのは冬である。冬は寒い。その冬の厚着を豫防するのは、秋の一つの仕事である。風はひかすな。しかし考へもなく厚着の習慣をつけて、一層風をひきやすくするな。

厚着奨励の本家は家庭である。親である。お年寄りである。こゝにも、幼稚園の一つの心遣ひがある。